

《資料紹介》『禅林象器箋』写本の調査事始め

堀 祥 岳

一、はじめに — 『禅林象器箋』とその研究課題—

『禅林象器箋』は、禅宗寺院における規則・機構・行事・堂舎・法具・器物などについて、内外の文献を援用しながら語義・由来等を考証した書物である。著者の無著道忠（一六五三—一七四四）は近世における臨濟宗屈指の学僧で、その著作は三七四種・九一冊にもものぼる^一。

無著道忠の学問的立場について特筆すべきは、内外に可能な限りの文献を渉獵し、かつ綿密な比較検討によって客観的に解釈を導くその研究姿勢である。『禅林象器箋』の「序」にみえる「大凡仏教・儒典、諸子・歴史、詩文・小説、目の及ぶ所、意の詣ずる所、遠く蒐め近く羅し^{あみ}」の文言が示すごとく、「援書目録」に採録された文献は、内典・外典あわせて七七〇種にもおよぶ。『禅林象器箋』は、後述するように無著道忠が生涯にわたって取り組んだ学究の成果物ではあるが、歴大な著作の一端にすぎないのもまた事実である。無著道忠の思想や業績については、飯田利行や柳田聖山らの研究成果があるが^二、無著の著作それぞれの成立過程については、なお明らかにする余地を残していると思われる。幸いにも無著は『照冰紀年録』のよ

うな年譜や『逐年閲書記』のような読書録を著しており、これらを通して無著の著述編纂プロセスを検証することが可能であろう^三。すでに柳田聖山は、無著の学問的背景として、寛文八年（一六六八）から同一二年にかけて五年間にわたり無著が写経生として加わった、妙心寺の大藏経書写事業（底本は建仁寺の高麗藏）の与えた影響に言及している。このように、無著の多大な業績について、それぞれの成果に至る経過を歴史的に究明することが研究課題として残されているのではなからうか。

他方、無著三二歳の年に刊行された『小叢林略清規』をのぞき、無著の著作は稿本のまま当初龍華院に遺されたが、龐大なその蔵書が、以後どのように伝来・流布してきたかについても、解明の余地があるように思われる。

今回は、たまたま自坊に『禅林象器箋』の写本を所蔵していた機縁により、同書の写本について僅かな検討を加えた。また、写本調査の過程で閲覧した春光院所蔵『象器緒餘』に、既刊の影印本に収録されていない「象器箋例言」なる頁があったので併せてその本文を紹介させて頂く。写本の調査研究は、研究課題として提示した無著道忠の遺著の伝来・流布に関わる内容であり、また「象器箋例言」の検討は、無著の著述活動全体における『禅林象器箋』の位置づけが示される点で意義をもつと考える。

二、『禅林象器箋』写本の所在

『禅林象器箋』は無著道忠の自筆稿本（原本）が妙心寺塔頭・龍華院に伝わる。本文二十卷・目録一卷の二一巻二一冊の構成である。本書の存在が一般に広く知られるようになったのは、明治四二年四月に原本を底本として開版（貝葉書院刊）されてからであろう。

写本の所在については、飯田利行『学聖無著道忠』の初版に掲載された目録を禅文化研究所が増補した「無著道忠禪師撰述書目」^四に判明分が掲載されている。○は筆者による補筆。

↓ 金閣寺、大機院（東福寺塔頭）、両足院（建仁寺塔頭）、**東京大学史料編纂所**、清見寺、**石川県立図書館**

李花亭文庫、足利学校、大中院（建仁寺塔頭）、東海庵（妙心寺塔頭）、校国寺（未詳）

このうち傍線を付した所蔵元については、国文学研究資料館作成の「日本古典籍総合目録データベース」によっても確認することができる。

↓ 石川県立図書館李花亭文庫（二一冊）、足利学校（巻七～一二、六冊）、大中院（二一冊）

さらに、同データベースによって**大阪大学附属図書館**（二二冊）に、また**大学図書館蔵書検索**によって**京都教育大学附属図書館**および**駒澤大学図書館**に、それぞれ写本が所蔵されることが判明した。

これらに加え、今回新たに写本の所蔵元として紹介するのが岐阜県高山市の**安国寺**（臨濟宗妙心寺派）である。当寺は南北朝時代に室町幕府によって全国に設置された安国寺のうち飛騨安国寺にあたる。

以上、右に掲げた写本のうち、太字で示した所蔵元に限り写本の調査を実施したので概略を報告したい。

三、調査写本の概要

①京教大本（京都教育大学附属図書館）

京教大本（筆者による略称、以下同）は、「表目」（首巻）一卷と巻一～二十の計二一冊から成る。

表紙に外題（題簽）はなく、袋綴の地に「象器箋巻一」～「象器箋巻二十」および「象器箋表目」と記されている。また、巻一～七の背には「定正院什物」の書き込みがある。巻一～二十にかけて【表一】のよう

な奥書があり、また収納箱のケンドン箱（はめ込み式）にも墨書を有する。

まず【表一】にみえる奥書により、この写本が安政五年（一八五八）から翌六年にかけて、越後国古志郡鷺巢村（現在の長岡市鷺巢町）の宝林山定正院二五世・杜多智泉（大道智泉）によつて書写されたものと判明する。定正院は、室町期の扇谷上杉家当主・上杉定正ゆかりの寺と伝えられる曹洞宗寺院である。筆跡から、書写は複数人の手によるとみられるが、唯一「哲應」の名が卷十の奥書に残される。この「哲應」は、『曹洞宗全書 大系譜』によれば、定正院二五世「大道智泉」を嗣いだ二六世「哲應儀俊」であろう。

【表二】『禅林象器箋』京都教育大学図書館所蔵本にみえる奥書

卷	年	月	奥書
14	安政5	7月中旬	安政五年初秋仲旬、宝林山・杜多智泉写焉
1	安政5	8月	安政五年仲秋之月、北越長城南郷鷺巢邑宝林山・杜多智泉写之、
6	安政5	(秋)	安政五午季秋、於寶林精舎、杜多智泉写焉
20	安政5	(秋)	安政五戊午季秋、越後古志之郡長城之南郷鷺巢邑定正院二十五世・大道智泉杜多写之、
7	安政5	12月上旬	安政戊午冬臘月上旬、禅餘而写焉、北越長城南郷定正院・杜多智泉
10	安政5	12月	維時安政五午極月、於鷺峰精舎、哲應写之
8	安政6	1月下旬	安政六未孟春下旬、於北越長城南郷鷺巢邑宝林山定正院・杜多智泉写之
4	安政6	(春)	安政六未春、得寺務之間写之、智泉杜多
3	安政6	4月	安政六未初夏、越後古志郡定正院・杜多智泉、得禅餘之閑・寺務之隙写焉
19			北越古志郡長城南郷鷺巢邑宝林山・智泉写之

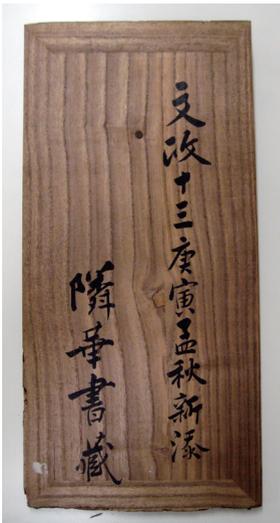
また、奥書にみえる「鷲峰精舎」は、定正院近辺に「鷲峰」の山号・寺号を有する寺院が見当たらないことから、鷲巢村に所在する定正院の別称と考えられる。

この写本が京都教育大学の前身・京都学芸大学の所蔵に帰したのは昭和二九年一月二九日だが、その経緯は不詳である。

注目すべきは、収納箱の墨書銘である。内部が三段となるケンドン箱（はめ込み式）の蓋に、「禪林象器箋」（表）、「文政十三庚寅孟秋新添、隣華書藏」（裏）の墨書がみえる【図一】。収納される写本は定正院什物であったことが明白であるため、本来は収納箱と写本は別々に伝来したものと思われる。

多くの写本が臨濟宗寺院に伝存する一方で、この写本を書写・架蔵した定正院が歴然とした曹洞宗寺院である点も興味深い。また、京都から離れた越後国で書写がなされたのは、底本の遠方への借用が可能だったのか、あるいは写本の流布が越後国まで広まっていたのか、今後の検討を要する。

【図一】京教大本を収納するケンドン箱（写真上）および蓋の裏書（写真下） 京都教育大学図書館所蔵



② 阪大本（大阪大学附属図書館）

阪大本は、首巻と巻一～二十の二一巻二一冊から成る。大阪大学附属図書館において長らく未整理のまま保管されていたものが平成一九～二〇年度に調査整理され、大阪大学附属図書館編『大阪大学附属図書館蔵 和古書目録 第二稿』（二〇〇九年）にて所在が公表された写本である。当本は虫損が甚だしく、巻九～二十の一二冊のみ閲覧可能とされている。

表紙には「禅林象器箋 九」「禅林象器箋 二十」といった外題（題簽）があり、同時に表紙中央上部に例えば「器物（下）、銭財」（巻二十）のような類題名が外題と同筆にて記されている。

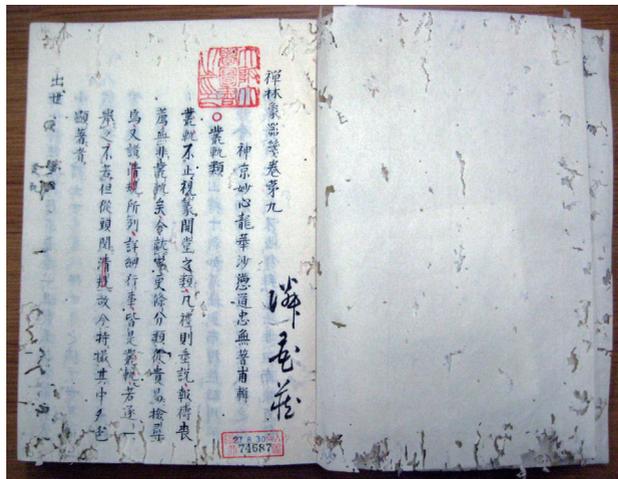
蔵印は大阪大学の蔵書印と受入印があるのみだが、各巻首右下に「隣華蔵」（あるいは「隣花蔵」と書き入れがあり、当本が妙心寺塔頭・隣華院旧蔵のものであったと推察される【図二】。大阪大学の受入印には昭和二七年八月三〇日を示すスタンプが押されているが、大学への移入経緯は不詳である。箱や軼は存在しない。

③ 李花亭文庫本（石川県立図書館李花亭文庫）

李花亭文庫本は、首巻一冊と二巻ずつ合綴される巻一～二十の一〇冊、計一一冊から成る。李花亭文庫は、金沢市出身の国文学者・藤岡作太郎（二八七〇～一九二〇）の旧蔵書で、和漢書三九〇二冊・洋書九五冊・

【図二】 阪大本・巻九の巻首

大阪大学附属図書館蔵



雑誌三種四七冊に及ぶ蔵書群である。巻首（第一丁オモテ）の蔵印は「李花亭文庫」印のほか、藤岡作太郎に係る「布地遠香」の印記がある。「前田侯爵家寄贈之記」印は、明治四五年に石川県立図書館が設立された際に前田家の資金援助によって李花亭文庫をはじめとする図書が購入された経緯に基づき押印されている。また、各冊最終丁には「石川縣立図書館」の受入印があり、「四四・六・一九」の年月日が押印されているが、これは明治四四年六月一九日を示すものであるう。

表紙左肩の題簽には「禪林象器箋 へ一／二」といった墨書がある。また袋綴の背にも「禪林象器箋」「へ一／二」の墨書がある。

各巻の最終丁には書写奥書が朱書きされる。巻一には「卅一年一月八日書了、卅二年三月廿六日校閱了」とあるが、巻二以降は書写に関する記載がない【表二】。

書写の経緯は、巻二十・末尾の本奥書に続いて朱書きされる書写奥書（イ、八〇丁ウラ）と、続く八一丁オモテ・ウラに記される書写奥書（ロ）により明らかとなる【図三】。イ・ロの全文は次のごとくである。

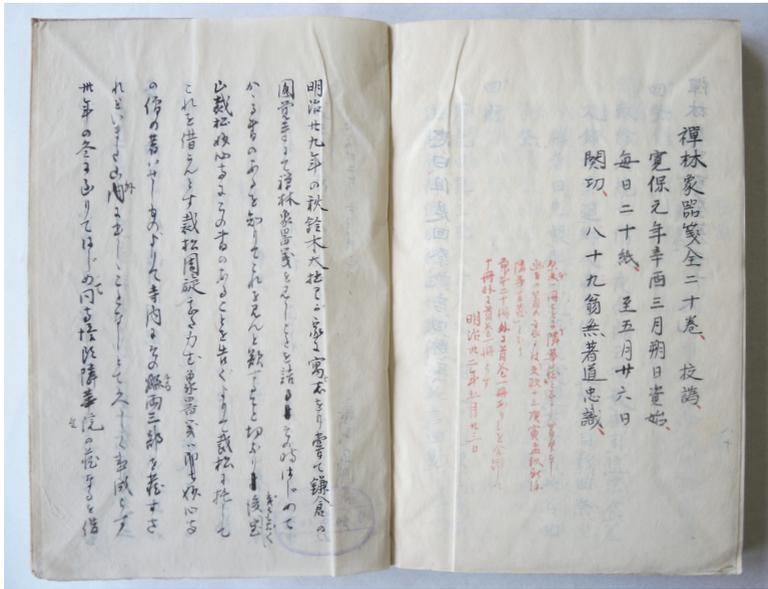
イ（朱書）「原本一冊（毎）ごと（毎）に「隣華蔵」としるし、署印なし。函の蓋の裏には「文政十三庚寅孟秋新添、隣華書蔵」とあり。原本二十冊、外に首卷一冊ありしを、合綴して十冊、外に首卷一冊とす。

明治卅二年五月廿三日

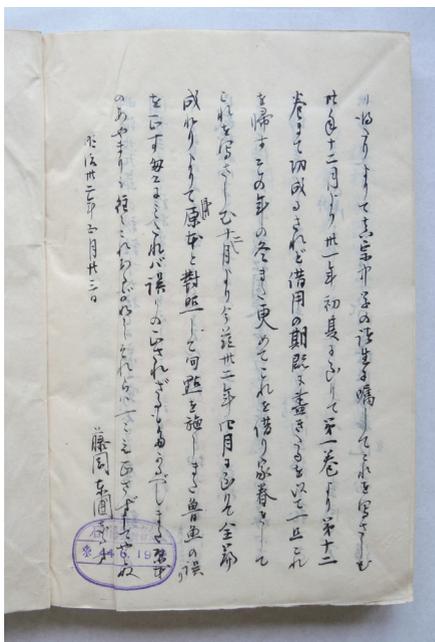
ロ 「明治廿九年の秋、鈴木大拙わが家に寓せしをり、嘗て鎌倉の円覚寺にて禪林象器箋を見しことを語る。その時はじめてかゝる書のあるを知りて、これを見んと欲すること切なり。後、幾くもなく宝山裁松妙心寺（以下同）にこの書のあることを告ぐ。よりにて裁松に托してこれを借らんとす。裁松周旋甚た力む。

〔図三〕 李花亭文庫本・卷二十の奥書

石川県立図書館所蔵



象器箋ハ妙心寺の僧の著ハせしもの、よりて寺内にその書兩三部を蔵す。されどいまた山外に出し、ことなしとして久しく事成らず。卅年の冬に至りて、はじめて同寺塔頭隣華院の蔵なるを借り得たり。よりて真宗中学の諸生に囑してこれを写さしむ。卅年十二月より卅一年初夏に至りて第一巻より第十二巻まで功成る。されど借用の期既に尽きたるを以て一旦これを帰す。その年の冬、また改めてこれを借り、家眷をしてこれを写さしむ。十二月より今茲卅二年四月に至りて全篇成



れり。よりにて原本と対照して句点を施し、また魯魚の誤りを正す。勿々にみれば、誤りの正されざるも多かるべし。また原本のあまりも往々これあるが如し。それらハ一々正さずしてやみぬ。

明治卅二年五月廿三日 藤岡東圃しるす。

イ・ロいづれの奥書も明治三二年五月二三日に記されたものである。藤岡作太郎（号、東圃）は、明治二九年に『禪林象器箋』の存在を知って閲覧を熱望し、同郷出身の教育者・宝山良雄（二八六八〜一九二八）の斡旋により、妙心寺塔頭・隣華院の所蔵本を借用するに至った。藤岡は東京帝国大学卒業後、明治二七年七月から京都・真宗大谷派第一中学校の教員となっており、明治二九年には真宗大学寮の教授に就任している。一回目の書写で「真宗中学の諸生」に助力を得ているのは、この縁によるのだろう。翌三〇年には第三高等学校教授に就任しており、藤岡は明治三三年に東京大学文科大学の助教になるまでの六年間は京都にて教壇にたっていた。

宝山は明治三〇年当時、妙心寺・花園普通学林の教頭の任にあった人物である^五。八歳までに両親を亡くした宝山は、一一歳で仏門に入って曹洞禅の修行を経験し、一九歳で還俗して同志社普通校から東京帝国大学に入学した経歴をもつ。宝山は大学時代に円覚寺・釈宗演師に参禅

【表二】李花亭文庫本の奥書

巻	奥書
1	卅一年一月八日書写了、 卅二年三月廿六日校閱了
2	明治卅二年三月廿七日校閱了
3	明治卅二年三月卅一日校閱了
4	明治卅二年四月三日校閱了
5	明治卅二年四月四日校閱了
6	明治卅二年四月五日校閱了
7	明治卅二年四月六日校閱了
8	明治卅二年四月八日校閱了
9	明治卅二年四月十六日校閱了
10	明治卅二年四月廿三日校閱了
11	明治卅二年四月廿六日校閱了
12	明治卅二年四月廿九日校閱了
13	明治卅二年四月三十日校閱了
14	明治卅二年五月四日校閱了
15	明治卅二年五月七日校閱了
16	明治卅二年五月十日校閱了
17	明治卅二年五月十三日校閱了
18	明治卅二年五月十六日校閱了
19	明治卅二年五月廿一日校閱了
20	(本文中に別記)

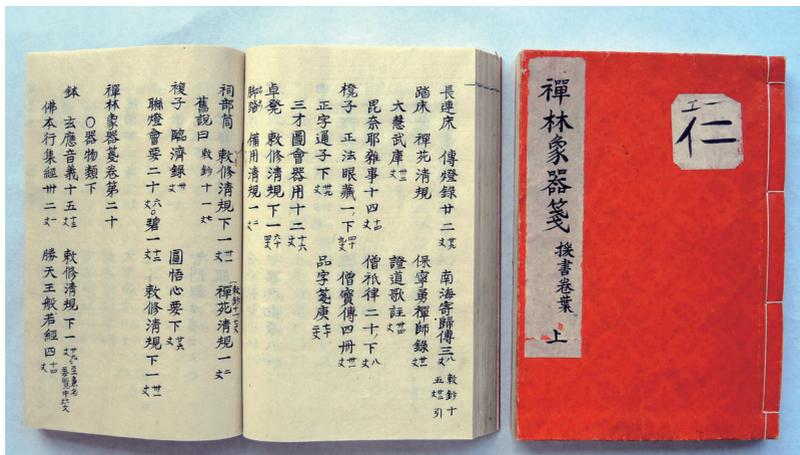
し、また湯島麟祥院の参禅会にも通っていた。また、同宿の山本良吉は、「加賀の三太郎」と称された西田幾多郎・鈴木大拙・藤岡作太郎らと第四高等中学校時代からの交友があり、藤岡作太郎と山本良吉は山本を介して東京で知り合っていた可能性もある。

さて、藤岡作太郎は明治三〇年一二月から三一年初夏までに『禅林象器箋』隣華院本を一部書写し、同年一二月から翌三二年四月にかけて残りを書写、三月末から五月下旬にかけて校閲を果たしている。教え子や家族を巻き込んで書写にあたった様子が奥書にみえる。

底本とした隣華院本は、一冊毎に「隣華（花）蔵」と記されており、かつ蔵書印がないという特徴から、②で示した阪大本がかつての隣華院本であると推定される。また、奥書イに引用された箱書きから、隣華院本の函は①で示した京教大本の函として伝来していることがわかる。

④安国寺本（飛驒安国寺）

安国寺本は、「禅林象器箋 目録」（外題）と題する一冊と「禅林象器箋 一」～「（同）二十」の二〇冊に、「禅林象器箋 援書巻葉 上（下）」と題する上下二巻二冊を加えた、計二三冊で構成さ



【図四】安国寺本の「援書巻葉」上下巻

れる。「援書巻葉」上下巻は、項目語ごとに引用書名が列記され、それぞれ引用丈（丁）が割り書きされている【図四】。原本および①～③⑥の写本には伝存しない巻で、今回紹介する写本の中では、安国寺本と次に紹介する駒大本のみに存在する。

収納箱は、はめ込み式のケンドン箱で、蓋の表に「当山四十三世／物先和尚代／無隠記焉」の墨書がある【図五】。物先宗峻和尚は慶応四年（一八六八）七月九日に示寂しており、本書は少なくともそれ以前に書写あるいは入手されたものとみられる。

「無隠」とあるのは、当寺四十五世・無隠董頭である。無隠は安政六年（一八五九）生まれで、物先が住職であった時期には十歳にも満たないため、箱書きの「記」を写本の記主と解することはできない。無隠が四十四世・琢道禅磨から住職を引き継いだのは明治二〇年一月で、箱が調達あるいは箱書きされたのは明治二〇年から無隠示寂の明治三四年までの時期と思われる。

【図五】安国寺本を収納するケンドン箱と蓋の表書

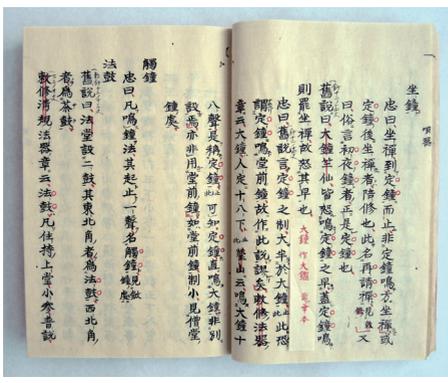


安国寺本には、「龍華本ノ文如左」(卷三・六四丁ウラ【図六】)、「大鐘作大鑑、龍華本」(卷十八・二〇丁ウラ【図七】)、「龍華本如左」(卷十九・九五丁ウラ【図八】)といった貼紙(付箋)があり、書写のちに龍華院所蔵の原本と校合していることがわかる(【表四】参照)。卷十では底本に錯簡があつたようで、「脱語(以下可考)」「胡跪」項)・「長跪又作跟跪ノ文此処カ」(「互跪」項)・「住持位前不可行過」といつた貼紙がみられる。最終丁ウラには「以下左ノ文アリ、目錄ニモ載之」として「住持位前不可行過」の一項の貼紙が付されている。

【図六】安国寺本・卷三「普庵」



【図七】安国寺本・卷十八「定鐘」



【図八】

安国寺本・卷十九の卷末



⑤ 駒大本（駒澤大学図書館）

駒大本は、「禅林象器箋 序総目」（外題）と題する一冊と「禅林象器箋 卷第一」～「（同）卷第二十」の二〇冊に、「（同）援書卷葉上（下）」の二冊を加えた、計二三冊で構成される。この構成は安国寺本と同様である。

当本は臨川書店の古書目録『和・洋古書善本特選目録（二〇〇五年 春期特集 第十二号）』に掲載されたものを駒澤大学が購入したものである。

各冊第一丁オモテの右下部に「玉龍藏書」の蔵印があり、玉龍寺（あるいは玉龍院）の旧藏書であったことがわかるが、玉龍寺（院）については未詳である^六。

収納箱は、はめ込み色のケンドン箱で、蓋の表に「禅林象器箋」、裏に「全部二十三卷」の墨書がある。袋綴の地には「象器箋卷一」～「象器箋卷二十止」とあるほか、背には「共廿三冊」の書き入れがある。

安国寺本と同様、書写後に龍華院所蔵の原本と校合がなされたことがわかる。卷十には補訂した貼紙に「龍華之源本ニテ改之」の書き入れがある。卷三の「普庵」、卷十九末尾の欠落についても、それぞれ貼紙によって補訂されている。

例えば卷十末尾の錯簡について安国寺本の校閲（補訂）が不十分なままになっているのに対し、当本は校閲が完了した状態にある。**【表四】**にみえる卷十八「定鐘」項の「大鑑」についても、安国寺本が付箋による校合の記録に止まっているのに対し、当本は白墨を用いて修訂が施されている。

卷三・七八丁には袋綴の中に「賓頭盧下、雜阿含経云々、五百阿羅漢俱 五上恐脱與字乎」の付箋が挟まっているが、これは原本の八五丁に挟み込まれた付箋と文言が一致する。他の付箋については管見の限り見出せなかったが、駒大本は原本との校合にあたって、付箋についても複製が施されたことがわかる。

⑥東大史料本（東京大学史料編纂所）

東大史料本は、「禅林象器箋 第一」（外題、以下同）～「（同）第三」、「（同）十二」～「（同）二十」（巻十七は欠本）の一二冊が現存する。巻四～巻十、巻十七、首巻（目録）は欠本となっている。箱はなく、「第一」～「十三」までの六冊が一帙に、「十四」～「二十」の六冊が別の一帙に収納され、二帙一二冊の構成をとる。

表紙見返しに「東京大学図書」「史料編纂所図書之印」の蔵印があるほか、第一丁オモテの右下部に「竹叢庫図書」の蔵印がみえる。「竹叢庫図書」については、現在のところ不明。裏表紙見返しに古書店のラベルを剥がした跡があり、古書店にて販売された経歴が伝わる。

表紙右下には史料編纂所の蔵書ラベルが貼付されるが、右上には蔵書ラベルを剥がした痕跡が各冊ともみえる。

巻三「普庵」や巻十八「大鑑」、巻十九末尾を原本および他の写本と比較すると、巻十八の「大鑑」が「大鐘」となっている点をのぞけば、おおむね原本に忠実に書写されていることがわかる。

四、諸本調査の小括

今回は、①～⑥の写本調査にとどまったが、【表三】【表四】での比較検討により、これらを次の三つのグループに分類することができる。

【表三】『禅林象器箋』諸本の比較1 (体裁)

⑥東大史料	⑤駒大	④安国寺	③李花亭	②阪大	①京教大	龍華院	所蔵者	
現存12冊	23	23	21	21	21	21	卷	
	23	23	11	21	21	21	冊	
第一～第三、 十一～二十 (十七欠)	序総目、一～二十、 援書卷葉上、 援書卷葉下	目録、一～二十、 援書卷葉上、 援書卷葉下	首、 一・二～十九・二十	(首卷)、 一～二十	表目、 一～二十	総目、 一～二十	構成	
竹叢庫図書	玉龍蔵書	×	李花亭文庫 ／布地遠香	隣華(花)蔵 (墨書)	×	×	蔵書印 (旧蔵)	
×	×	×	○	×	○	○	奥書	
22.8 × 16.5	27.5 × 19.4	23.3 × 16.2	24.0 × 16.8	26.9 × 19.8	27.3 × 19.3	23.0 × 16.5	寸法	
2帙	(裏) 禅林象器箋 全部二十三卷	(裏) なし	ケンドン箱	6帙	(なし)	ケンドン箱	形態 未調査	箱
	(表) 22.0 × 29.9 × 42.0	(表) 当山四十三世物先 和尚代、無隠記焉						

【表四】『禅林象器箋』諸本の比較2（本文の異同）

所蔵者	龍華院	①京教大	②阪大	③李花亭	④安国寺	⑤駒大	⑥東大史料
卷三 「普庵」項 『搜神大全』の 欠落部分	欠落なし	欠落あり	（未調査）	欠落あり	欠落あり ↓「龍華本 ノ文如左」の 付箋	欠落あり ↓貼紙にて補訂	欠落なし
卷十（末尾） 「胡跪」項 7行分の錯簡 「住持位前不可行過」項 の欠落	錯簡なし 欠落なし	錯簡あり 欠落あり	錯簡あり 欠落あり	錯簡あり 欠落あり	錯簡あり ↓補訂を試みる 付箋あり 欠落あり ↓貼紙にて補訂	錯簡あり ↓貼紙「龍華之 源本ニテ改之」にて補訂 欠落あり ↓巻末に補訂	（欠本）
卷十七 「磨衲」 項での 頭注	あり	なし	なし	なし	あり	あり	（欠本）
卷十八 「定鐘」項	大鑑	大鑑	大鑑	大鑑	大鐘 （貼紙） 「大鐘作 大鑑、 龍華本」	大鐘 ↓（白墨） 大鑑	大鐘
卷十九（末尾） の「油単・包・ 包鈎」項	あり（改丁）	なし	なし	なし	「龍華本如左」 として貼紙に より追加	最終丁↓貼紙 にかけて追加	あり（改丁）
首卷・ 援書目録の 「中峰 東語西話」	〽西話	〽西語	（未調査）	〽西語	〽西語 ↓（朱筆） 西話	〽西語 ↓（白墨） 西話	（欠本）

A (1)~(3)

これら三つの写本のうち、まず③は、先に引用した奥書イから、各冊に「隣華蔵」の墨書(【図二】)をもつ②を底本とすることが明白である。また、同じく③の奥書イにより、現在①を収納している箱(【図一】)が旧来は②を収納する箱であったことも判明する。【表四】をみると①~③は同じ特徴を有しており、地方寺院の什物となった①もまた、③と同様に②を底本とすることが想定される。

つまり①~③は、隣華院旧蔵の②を底本とした同一系統の写本ということが出来る。なお、箱書きにみえる文政一三年(一八三〇)の「新添」は、②の写本そのものに書写年を示す奥書がみられない以上は、この年次を書写年と断定することはできない(箱の後補・新調を示す可能性がある)。

B (4)⑤

④と⑤は、「援書巻葉」と題する上下巻を含む二三冊本として存在する点から、同じ系統に属すと考えられる。④⑤はいずれも「龍華本」による校閲を果たしている。したがって、底本としたのは龍華院の原本ではない写本となる。底本の本文についてはA類の系統と特徴を同じくしており、共通する底本の存在が想定される。今後さらに写本の調査を続ければ、底本となった写本や「援書巻葉」の淵源について明らかになる可能性がある。

C (6)

⑥は欠本があり比較できない巻もあるものの、巻三や巻十九に欠落がなく原本に限りなく忠実な書写内容となっている点において、AB類と別系統の写本であることは明らかである。

いずれにせよ、各写本の系統（書写関係）を論じるためには、未確認の写本について調査を進めていく必要があり、本稿にて早急に何らかの結論を出すことは困難かつ無意味である。

他の写本について、例えば足利学校本は、奥書・蔵印など書写に関わる書誌情報がない点を確認しているが、実見には至っておらず、今後確認作業を進めたい。

建仁寺両足院本については、近年の科研費調査により所蔵典籍について目録が整備され、基本的な書誌情報を得ることはできる。それによれば、両足院本は江戸中期における高峯東峻による筆写本で「東／峻」（朱・方印）の印記を有する。また、同書には高峯東峻による書き入れもあるようで、すでに研究利用もされている。

③李花亭文庫本の奥書口には、鈴木大拙の証言として円覚寺に『禅林象器箋』が所蔵されていたことが明記されているが、こちらについては現在調査中である。なお、④安国寺本のケンドン箱に表書きを施した無隠和尚の頂相には、円覚寺派管長・釈宗演師による賛が付せられている。奇しくも両師とも同じ安政六年一二月生まれである。無隠の行録については十分明らかになしえないが、両者をつなぐ縁として考えられるのは、無隠が円覚寺にて修行し釈宗演師と同参であった可能性である。④の写本と円覚寺本に関連があるかは定かでないが、この方面でも調査を続けていきたい。

五、むすびにかえて — 付、『象器緒餘』所収「象器箋例言」の紹介 —

ここまで『禅林象器箋』の写本に関する雑駁な調査ノートに終始し、冒頭で研究課題として掲げた、無著禅師の著作の流布・受容という大きな課題については一歩も近づくことができなかった。今後も写本等の調

査を続けることで、まずは書写の時期やルートについて明らかにすることができればよいと考えている。

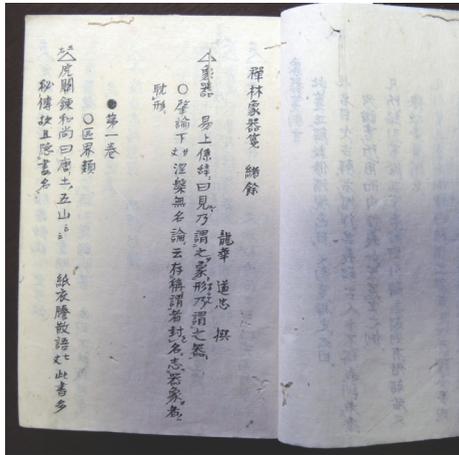
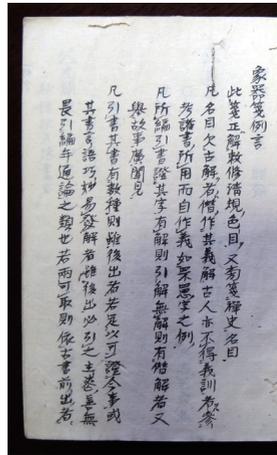
①の写本が曹洞宗の地方寺院に伝来したように、『禅林象器箋』の存在はある程度は都鄙に知れ渡っていた可能性がある。④の安国寺本の存在が今まで一地方に埋もれていたように、各所に同様な写本が眠っている可能性があると思定される。『禅林象器箋』の写本について、各方面から知見をお寄せ頂ければ幸いである。

最後に、このたび写本調査で訪問した妙心寺塔頭・春光院において北苑文庫として架蔵される無著禅師の『象器緒餘』冒頭に、既刊の影印本に収録されていない「象器箋例言」なる頁があったので本文を紹介したい。

同書は周知のごとく『禅林象器箋』の拾遺とでもいえるべき書である。柳田聖山は無著禅師の著作に「未決」や「緒余」といった一冊が附録されることの多い点を指摘し、未解決の課題を列記して後賢の解決に委ねるその姿勢に、妥協なき科学的な解釈を追究する無著の文献学的立場を読み取っている九。

【図九】「象器箋例言」

〔春光院所藏〕「象器緒餘」



【釈文】象器箋例言

此箋正解敕修清規色目、又旁箋禪史名目、凡名目欠古解者僭作其義解、古人亦不得義訓者、參考諸書所用而自作義、如罽毘字之例

凡所編引書証其字有解則引解無解則有僭解者又拏故事廣聞見、凡引書其書有數種則雖後出者、若足以可証今事、或其書言語巧妙易發解者、雖後出必引之、主喪善無畏引編年通論之類也、若兩可取則依古書前出者、

【読み下し】

此の箋正は『勅修清規』の色目を解き、又た旁ら禪史の名目を箋す。

凡そ、名目に古解を欠く者は、僭して其の義解を作す。古人も亦た義訓を得ざる者をば、諸書の用うる所を参考して自ら義を作す。「罽毘」の字の例の如し。

凡そ、編む所は、書を引きて其の字を証す。解有れば則ち引解し、解無くんば則ち僭解する者あり。又た故事を挙げて、聞見を広く。

凡そ、書を引くに、其の書に數種有れば、則ち後出の者と雖

も、若し以て今事を証すべきに足り、或いは其の書の言語巧妙にして解を發し易き者は、後出と雖も必ず之を引く。「主喪」の善無畏に『編年通論』を引くの類いなり。若し両つながら取るべくんば、則ち古書前出の者に依る。

既刊の影印本では『禪林象器箋』に引き続いて『象器緒餘』が収録されている¹⁰。ところが影印本に収録されるのは【**図九**】左の「禪林象器箋 緒餘」以降であり、本書巻頭の「象器箋例言」の一丁は未収録となっている。

この「例言」によると、『禪林象器箋』は、『敕修百丈清規』の法式・条目を解釈し、かつ禪宗の歴史における物事の名称を編纂したものと位置づけられている。

『禪林象器箋』の前提に『敕修百丈清規』があることは、無著が『庸峭余録』に付した識語によっても明らかにある。つまり、『庸峭余録』識語に、

「勅修清規旧鈔、其解本規者左觸取之、其解名色者象器箋撰入、不可收此二書者録之、名庸峭余録」

（『動修清規』の旧鈔、其れ本規を解する者は「左觸」に之を取り、其れ名色を解する者は「象器箋」に撰び入る、此の二書に収むべからざる者、之を録し、『庸峭余録』と名づく。）

とあり、『敕修百丈清規』の写本・校勘本を蒐集する中で、清規（規則）の解釈に通じる部分は『敕修百丈清規左觸』に編入し、語義の解釈に通じる部分は『禪林象器箋』に、両者への収録に適さない部分の拾遺が『庸峭余録』として、明確に自著の対象について棲み分けている。

「象器箋例言」では、続いて語義解釈の作法について、無著の方法論が述べられている。意識すれば、
・古人による解釈のないものは自ら類推して解釈を施す。

・訓み方すら不明な場合は、諸書にみえる用例を参考にして自ら解釈する。

・引用書について、より古い書（の解釈）を優先するのが原則ではあるが、解釈がよりの確であったり、説明が巧みであったりすれば、後出の書であっても採用する。

といった内容が述べられている。

『象器緒餘』巻末の奥書には、

「自元禄十年丁丑正月朔資始撰次、到明年戊寅六月十二日断手。『此是旧撰十卷者』」

（元禄十年丁丑正月朔より撰次を資始し、明年戊寅六月十二日に到り断手す。（此は是れ旧撰十卷の者なり。）」

とあって、すでに無著四五歳の元禄一〇年（二六九七）の段階から『禅林象器箋』の執筆が開始され、当初は十巻本として編纂が進められていたことが読み取れる。

このように、無著道忠禅師のライフワークとして進められた『禅林象器箋』について、その編纂の経過についても、なお明らかになっていない部分がある。引き続き研究課題として検討を続けていきたい。

【註】

一 禅文化研究所資料室編『無著道忠禅師撰述書目（二）龍華院所藏之部』（禅文化研究所、一九六五）

二 飯田利行『学聖無著道忠』（禅文化研究所、一九八六、初版は一九四二年刊）、柳田聖山「無著道忠の学問」（『禅学研究』五五、

一九六六。なお、これらに先行する論考として、村田無道「無著道忠禪師」(『禪林象器箋』貝葉書院、一九〇九)、松本文三郎「無著禪師と禪宗文学」(『仏教芸術とその人物』同文館、一九三三)、南川宗謙「無著禪師と祖芳和尚」(『妙心寺六百年史』一九三五)などがある。

三 このような視点を含む研究として、片山晴賢「無著道忠編纂の語録辞書について(一)」(『駒沢短期大学研究紀要』一八、一九九〇)がある。

四 飯田利行『学聖無著道忠』(禅文化研究所、一九八六)所収。

五 松本皓一「『教育者』型人格における宗教体験と聖・俗の行動傾向——栽松・宝山良雄の場合——」(『駒澤大学佛教学部研究紀要』四七、一九八九)

六 蔵書印のみが手がかりだが、今後とも調査を続けたい。

七 赤尾栄慶編『建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究「一」建仁寺両足院聖教目録』(京都国立博物館、二〇一〇)※平成一九〜二二年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果中間報告書

八 尾崎正善「警策考」(『曹洞宗研究員研究紀要』二七、一九九六)。本論文の存在については本多道隆氏より御教示を得た。

九 柳田聖山「無著道忠の学問」(『禅学研究』五五、一九六六)

二〇 『禅学叢書 九 禅林象器箋・葛藤語箋・禅林句集辨苗』上下冊(中文出版社、一九七九)

【付記】 拙稿の作成にあたって、妙心寺派教化センター・教学研究委員(野口善敬師・廣田宗玄師・丸毛俊宏師・本多道隆師・小川太龍師)の各位より適切な助言を賜った。ここに深謝の意を表したい。

円覚寺本の所在について、入稿後の調査で、円覚寺塔頭・佛日庵所蔵の二三冊本が存在することを知ることができた。また、松ヶ岡文庫にも二点の写本が所在することを確認した。今後調査を進めたい。